

#22

劇団員

## 歌を通して人と出会う



今回のゲストは、劇団員のおだあいの小田藍乃さんです。小田さんが所属するのは日本語のオペラの劇団で、劇場公演のほかにも、日本各地の学校を訪れて、子どもたちに歌や劇の魅力を伝えています。「歌役者」として、パワフルな歌声と豊かな演技力で、観客を物語の世界に引き込む小田さん。しかしそれだけではなく、チームの一員として裏方の仕事もたくさんしているそうです。いろいろな人と出会えるのがこの仕事の面白さだという小田さんに、劇団員の仕事について詳しく伺います。

MC・リポーター  
廣村季生

## 劇団員の仕事とは

ひとくちに劇団と言っても、さまざまな仕事があります。ステージで演じる人、大道具や小道具・衣装を作ったり管理したりする人、音声や照明を扱う人、公演の企画や広報をする人。そうした人々が協力し合って、ひとつの舞台芸術を作り上げます。小さな劇団では一人何役も仕事を分担することが多く、小田さんの劇団でも、数人で巡回公演をするときには、ステージに立つ人も、大きな荷物を運んだりトラックを運転したりするそうです。

## 劇団員になるには

とくに決まったルートはありません。養成所がある劇団の場合は、まず養成所で学んだあと、試験を受けて劇団員になるという方法があります。また、人の紹介やオーディションなどを経て劇団員になる人もいます。そのためには技術や経験が問われることが多いため、専門学校で演劇について学んだり、アマチュア劇団で経験を積んでから入団する人もいます。

このページ掲載の文章・画像の無断転載を固く禁じます。



## 劇団員・小田藍乃さんに聞きました！

**廣村**：小田さんはどんな劇団に所属されてるんですか？

**小田**：はい。私が所属している劇団は、子どもも楽しめる、日本語でオペラをやる劇団です。役者は40人ぐらい、あと、営業をしたり、舞台の公演に向けての準備を整えてくれる人が10人ぐらいいて、全部で50人ぐらいの劇団に所属しております。

**廣村**：オペラってというと外国語のイメージがあるんですけど、日本語なんですね。

**小田**：そうなんです。私もオペラを勉強し始めたころは、イタリア語、ドイツ語、フランス語とか、やっぱりヨーロッパを中心に栄えたものなので、そういうイメージでした。だけど、「舞台上歌いながらお芝居をする」という意味では、どこの国のものでも共通していると思います。「歌いながらお芝居をする。お芝居するのは役者さん」ということで、自分たちのことを「歌役者」なんて言いながら活動しております。

### 長いときは2か月も……各地の学校をまわる旅公演

**廣村**：小田さんの劇団は、どんなところで公演をしてるんですか？

**小田**：劇場で公演をすることももちろんありますし、あとは小学校の体育館とか。

**廣村**：小学校？

**小田**：はい。小学校、中学校、高校もあるんですけど、体育館で子どもたちの前で公演したりしています。なかなか興味がないと、舞台って見に行かないじゃないですか。そうやって授業で見る機会があるといいきっかけになるかな、と思ってやっています。

**廣村**：地方の学校に行くときは、どのぐらいの人数で、何日ぐらいかけて行かれるんですか？

**小田**：本当にいろいろなんですけど、だいたい3つぐらいのチームに分けて、少ないチームですと4、5人で、多いチームですと20人ぐらいの歌役者が集まって、大中小さまざまなチームで演目ごとに（地方を）回っていきます。短いと、その日に行ってその日に帰って来るといって感じで1日で終わるんですけど、遠くに行くときや、その地域全部公演するみたいになると、2か月ぐらい帰って来ないこともありますね。朝、全員でトラックからの荷物を降ろして体育館に入れて、その後、大道具の係、衣装の係とか先生との打ち合わせの人とかに分かれて準備して、公演をして……で、公演が終わるとまた各部署に分かれて片付けをして、トラックに詰め込んで、そのトラックも劇団員、歌役者が運転をして次の場所に行く……っていうのを、繰り返してやっています。

**廣村**：子どもたちの反応ってどんな感じですか？

**小田**：子どもたちは、本当に素直で、その場で感想をくれたりします。たとえば、自分がヒロインをいじめる意地悪なお姉さんの役とかやったりすると、「うそつき！」とか、「やめる！」とか、「出てけ！」とか。ヒロインの子が「あれはどこに行ったのかしら？」みたいに困ってたりすると、「後ろだよ！後ろだよ！」とか、「あの人が持ってったよ！」とか。そういう子どもたちの声援の中でやってる感じがあって、とても面白いですね。

歌が好きで進んだ音楽大学……ところが

**廣村**：小田さんは、歌はどこで勉強されてたんですか？

**小田**：歌はですね、中学生のときに合唱部に入ったのがきっかけで。合唱部もコンクールに積極的に出る盛んな学校だったので、もっと「音楽ってどんなことかな」って知りたくなって、音楽専攻のある音楽高校に通って……その後も、音楽大学へ進んで声楽を勉強しました。

**廣村**：音楽大学ってということは、本当に、専門的に音楽の勉強されてたんですね。

**小田**：そうなんですよね。でも「声楽科」っていうと、まずイタリア語から勉強を始めるんですよ。それで、ドイツ語、フランス語、ちょっとロシア語もやったりとかして。それで「自分は日本語の歌を歌いたいんだ」って言っても、同級生は「日本語かぁ」みたいに言われてショックを受けたり。でもそういう友達は、もう同級生なのにイタリア語がペラペラだったり、もうイタリア語なんか終わってドイツ語（で歌っていたり）、「私はフランスに行きたいの」とかそういう人たちがばかりで。もう完全に自分の居場所を見失い……自分って歌が好きでこんなにがんばってきたのに、こんなに下手くそだったんだって思えてきて。このままやっていたはいけないんじゃないかみたいな気持ちになって、だんだん大学にも行かなくなってしまっ

**廣村**：では、声楽家は目指さなかったんですか？

**小田**：そうですね。いわゆる「声楽家としての将来」みたいなのはあまりイメージがつかなくなっていました。「じゃどうしたらいいんだろう」って考えて、「やっぱり日本語で歌いたいな」って思い、童謡にたどり着きました。それで自分は「うたのおねえさん」として演奏するようになっていきました。でも歌う場所がなかったので「とにかく歌う場所作らなきゃ」って思って、子どもが集まるイベントに自分で出向いて行ったり、児童館に行ったりとかして「自分は“うたのおねえさん”をやっているんだ」「一度歌わせてくれないか」っていうふうに、いろんな所で頼み込んで、歌う場所を探していきました。

私、大学卒業したのが2011年の3月だったんですね。東日本大震災の直後だったので、世の中がすごい自粛モードになって、楽しいこと全部なくなっちゃって。なんか自分も卒業するし、「声楽家じゃなくていいし、何もしたくない」みたいな気持ちになってたときに、ちょうどラジオで、アンパンマンが突然流れたんです。普通のニュースだったんですけど、ハツとして。「あ、今もしかしたら、避難所にいる子どもたち何人笑ったのかな？」って。「何人ホツとしたかな」って思ったときに「あ、子どもに歌う活動をもっと広げていきたい。みんながホツとする音楽になる。そういう経験をみんなに与える活動をしていきたいな」って思いました。

### 日本語で歌う劇団との出会い

**廣村**：就職活動ってされたんですか？

**小田**：就活はしなかったですね。それで、いろんなところに行って歌う場はどんどん増えていったんですけど、お金は全然入ってこなくて、アルバイトをしながら歌を歌う状態が続いていました。そのころちょうど今の劇団に友達が一人いて、その友達と久しぶりに会って「今どうしてるの？」っていう話をお互いしたときに、その子が日本語のオペラを届ける劇団にいるんだって話を聞いたんです。すごく面白そうと思って、その劇団の公演を見に行ったんですね。そうしたら本当に日本語でオペラをやっている。私が大学時代にあんなに悩んだ外国語のオペラ……「音楽はこうでなきゃいけない」ととらわれていた自分をすべて取り払うような公演で、とにかく自分にとって衝撃でした。オーディションがあるっていう話を聞きオーディションを受け、その次の年ですね、2012年に劇団員として入座しました。

### 好きな音は…毎回違う“ホール”の音

**廣村**：お仕事をしていく中で好きな音ってありますか？

**小田**：私たちはいつも小学校の体育館とかで公演してるので、毎日違う体育館っていうホールに出会います。なので、「今日の体育館…今日のホールはどんな響きかな」なんて考えるのが好きですね。

**廣村**：違うんですか？

**小田**：はい。劇場だと反響板があったり、すごく整備されて美しい音だと思うんですけど、体育館ってなんかこう、やっぱりちょっと独特で。思いもかけないところから音が返ってきたりとか、「今日は天井に抜けるね」とか、「今日は床に跳ね返るね」とか、現場ごとで音を探していく。そういうのが本当に楽しいなって思います。

### 遅刻して気付いた人の優しさ

**廣村**：仕事を始めて、印象に残ってる大きな失敗ってありますか？

**小田**：劇団に入ってまだ2か月も経ってないくらいの新人のときに、寝坊しちゃったんですよ。それで起きたときに集合時間だったんですね。今から（行ったら）3時間くらい、電車で2時間半かな？かかるので、絶対間に合わないと思って。「このまま私はもう劇団に入ったことをなかったことにして消えてしまおうかな……」ってすごく思ったんですけど（笑）。「いやだめだ。ちゃんと謝ろう。とにかく現場には行かなきゃ」って思って、すぐに電話をして、大慌てで行って。そしたらもちろん、着いたときには舞台はもう出来上がってるし、先輩たちは本番前のお稽古も終わってたかな。もうあと本番を迎えるだけみたいな状態で。「すいません。すいません」って言って。もう絶対にどなられる、「帰れ！」とか怒られると思ったのに、誰ひとりどならなかったんですよ。「気を付けなよ」とか「はいはい」

とか受け入れてくれて。それにまずびっくりして。そしたら同期がこっそり「お前のために先輩が仕事取っといってくれたよ」って言って。照明のケーブルに足が引っかけられないようにガムテープで貼って留めるっていうだけの、ちょっとした仕事なんですけど、(その)仕事を取っといってくれて。その先輩が「遅れてきて何もやる事がなかったら、あいつ来た意味なくなっちゃうだろ。だからここだけあいつにやらせな」って同期に伝えてくれてたみたいで。私泣きながらテープ貼って、「本当にすみませんでした」って。「ああ、人ってこんなに優しいんだな」って思っただけ。本当にそれを一番覚えてますね。一生忘れない出来事です。



#### 時間を共有し、人や場所と出会う

**廣村**：この仕事を選んでよかったなって思うのはどんなことですか？

**小田**：普通に生活していたら絶対出会わない人たちとも、同じ時間を共有できるんですよね。そうすると全然知らない人でも舞台が終わって会うと、もう、知り合いになっちゃってるんですよ。あと、いろんなところに行って演奏するので、誰も知らないような山の上のほうの小学校とか行くと、そこには全校生徒が7人しかいないとか、半島の先の方に行くと、そこにはサーファーの子どもがいっぱいたとか……そういう絶対普通の旅行だったら出会わないような“場所”や“地域の特性”みたいなものに出会ったり(します)。そういうのは本当に面白いし、しかも、音楽に触れる機会がほとんどなかった子たちに音楽を届けられることができる。お互い“ないもの”をもらえるっていう関係はすごく面白いなって思います。

#### いろんな音楽を聞いてみよう！

**廣村**：将来、歌の世界で仕事をしたいって思っている高校生にアドバイスをお願いします。

**小田**：歌の世界っていっても本当にたくさんあって。クラシック音楽の中にもフランス音楽、ドイツ音楽、イタリア音楽、いっぱい分かれてるし、さらにクラシックだけじゃなくて、ジャズっていうものがあったりシャンソンがあったり。いろいろあるから、「自分はこれ」ってまず決めないで、いろんな音楽を聴いてみるといいんじゃないかなって思っただけ。本当に歌のお仕事って本当にいろんなやり方があるので、自分が誰かの前で歌うってだけが仕事の形じゃないな……(などと) こだわらずにいろいろ見ていくと楽しいかなと思います。

物語や歌を自分の中にためていきたい

**廣村**：小田さんの夢って何ですか？

**小田**：夢はですね、自分がいつかおばあちゃんになったときに、「藍乃おばあちゃんのところに行ったら、なんか面白いことやってくれるよ」って、いろいろな人が集まってくるような、そんな人になりたいなっていう大きな夢がありまして。いろいろなことがみんなに面白いこととして与えられるように、今のうちにいろいろな物語やいろいろな歌、いろいろなことを自分の中にためていきたいなって思っています。そのいろいろなものをためるためには、いろいろな歌役者としての経験が必要だなとっていて。本当に歌役者っていうのは、かわいい娘になることもあれば意地悪なお姉さんになったりもするし。いずれはすごく味のあるおばあちゃん役とかも（やりたいです）。いるだけで存在感あふれる、そんな“人”にもなりたいけど、そういう“役者”としても。パワーを発することができる……そんな人になりたいなって思っています。

★あなたがこれまでに見た演劇のなかで、印象に残っているものはありますか？

.....  
.....  
.....

★チームで一つの作品を作り上げるためには、何が必要だと思いますか？

.....  
.....  
.....

★「こだわりを捨てたら視野が広がった」という経験は、あなたにはありますか？

.....  
.....  
.....

.....  
.....  
.....  
.....

このページ掲載の文章・画像の無断転載を固く禁じます。